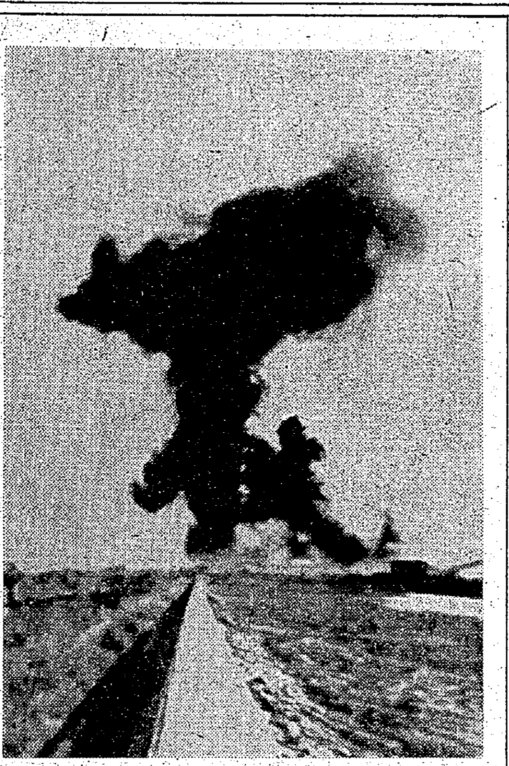

11・9大爆発手記

思い出す悪夢の日

職場新聞〝いのち〟NO三六から

T・T生

昭和三十八年十一月九日。

その日は曇り日だった。肌寒い日ではなかったろうか。

三川鉱正門前で、パチンコ仲間のS君が、「今日は出勤する気のせんけん、いっそ日ぼて（仕事にゆくのを途中でやめること）せんか」と、親指を動かして見せながらさそった。

俺が「今日は土曜日ばい。それより早あがりして、いっぱい飲もうじゃっか」というと、彼は眉をしがめながら「一分八厘（歩増しのことで、いまはない）のなぐれ掘進どんして何になるもんか」と言う。

俺も、日ぼてしゅうかなーと七分通り傾いたけれども、正月を前に給料のことを思うと、「やっぱりがんばらにゃー。日役でもよかじゃっか」と自問自答して、ていよく誘いをことわった。これが運命の別れ道になることなど露知らず。

その頃会社の差別配役は頂点に達していて、俺たち三本線（三池労組員が黒塗りの坑内帽を、「団結」「抵抗」「統一」の信条をあらわす白線でふち取っているところからこう通称している）は日役か、なぐれ掘進か、だれでもいやがる切りあがり掘進くらいが最高の収入源だった。

その日繰込み場で、職制との間にいざこざがあったので「そんなら昇坑してから話し合おう」ということにし、人車に乗り込み、常のようにY談に花を咲かせながら坑底に着き、「今日はあんまりよか話の出たけん、どうせなぐれたい」といいながら人車を降り、それぞれ切羽へゆこうとした途端だった。パッと電灯が消えたのである。あらゆる電気機械がとまり、あたりは真っ暗闇となり、坑内は一瞬しーんと静まりかえった。俺の頭を、そのとき不吉な予感がさっとよぎった。

あと、いつもの停車くらいに思ったが、電話連絡しようと受話器をとると、全然通じない。

えーい、ままよ、切羽までいって、いつからでも掘進できるように準備しとこうと話がまとまり、ハンマーを立て、エヤーエースをつなぎ、エヤーコックを開いたがうんともすんとも言わない。

おかしいなーと思い、係員に連絡する。

「電車が脱線して、エヤー管を破ったらしい。今日はなぐればい」と係員が言う。

「ちえッ、こんなことなら日ぼてしとった方がよっぽどましやったばい」と思った。

卸切羽にいって帰ってきたE君が、「水がガンブリ（いっぱいの意味）で、早よポンプば動かさなきゃ仕事にならん」と、しきりにぶつめいた。

俺は仕方なしに、切羽で待っていた。同僚と話している間に切羽も大分熱くなり、息苦しくなってきた。

また不吉な予感がサーッと横切り、闇の中に消えていった。そこへ係員が来て、「何か重大な事故があったらしいので、本線まで出て待機してください」と言った。

「重大な事故て、何かん」

「電話連絡のでけんのでわからん」

「何ごとじゃろか?」などと話しながら、マイトをマイト袋に詰め、本線に出る。

スーと、冷たい空気が背筋をなでて走る。

ちょっと、息苦しい感じがするが、気のせいかなーと思い思い、中間まできた。

すると、だれか知らないが、ベルト坑道の溝の中に頭を突っ込んで倒れ、口からアワを吹いている。

「どげんしたつかん?」と肩をもとうとした時である、赤さびた煙が坑道いっぱい広がって流れてきた。

「やっぱり電車の脱線で、エヤー管を噴き破った煙ばい」と防じんマスクを着けたが、だんだん胸の動悸が激しくなってきて、足も動かなくなってきた。気持だけは前へすすもうとするのだが、かんじんの足がいうことをきかない。ついにはその場に、へたへたと座りこんでしまった。次の瞬間意識がもうろうと薄れてゆき、最後には前のめりに倒れて天国へと旅立った。

何時間経ったか記憶はないが、割れ鐘のようなえん魔大王の声。

「お前はまだ天国へ来る資格がない。帰りうせろ」

赤鬼・青鬼が俺の首根っ子をつかみ、俺の体は軽がると放りあげられた。いや、そんなことはあり得ぬことだが、俺はそうして意識が覚めた。

寒くてたまらない。周囲を見まわす。人が何人も倒れている。左、右と首を動かして見る。キャップランプの光が、かすめたのだ。

「オーイ、こん人は生きとるぞ」と、たれか呼んでいる。三〜四人の人が、忙しく走ってきた。

俺は、またもうろうとなる。ほっぺたを、いやというほど打たれる。パーッと意識がもどる。またもうろうとなる。ハッシとなぐられる。その中に俺は、何もかもわからなくなってしまった。

次に気がついたのは、病院の長椅子や机のうえに、十四〜五人の仲間たちとならんで横たわっていたときだった。

俺は、小便がしたくなった。部屋のそとに出る。後から、だれかがついてきた。やっぱり、小便がしたいのだろう。

扉を開けて、後からきた人といっしょに、思いっきりホースを開いた。

気分が、それでいくぶんか落ち着きを取り戻そうとしていた。その時——「あんたたちは何しよっと。そこは便所ではなかつよ。看護婦詰所よ」と金切り声。ぼやっと立っている俺は、「便所はあそこじゃなかね」と[illegible]が、とうとう便所がわからず、ここと思ってやったら通路だったようだ。看護婦があきれ顔で、ぶつぶついいながら立ち去ったことを思い出す。

あれから七年間、俺は失敗の連続だった。笑うに笑えないのだ。いったい俺はどげんなっとるのだろうか。疑問はわきつづける。

子どもたちに対しては親父としての威厳をうしない、妻には主の座を奪われ、もう夫たる資格はない。

恐るべき昭和三十八年十一月九日の大爆発。記念すべき日などとはナンセンス。あの日は俺たち労働者に、人間として生きるよろこびをうしなわせた悪夢の日でなくてなんであろう。

「アルプスの山嶺に消ゆ」

ダークの創作曲レコード化

六月に名古屋労音で初演されたダーク・ダックスの創作組曲「アルプス山嶺に消ゆ」（制作全国労音）がキングレコードからLP盤で発売されました。五年前モンブラン山群の登頂を挑み遭難したフルート奏者・加藤恕彦さんをテーマにした合唱組曲で、レコードには本人のフルート演奏や、遭難を伝えるスイス放送などもはいっています。

【KNA】

友への手紙

三川　木　村　守

花売りの老爺の股間に自転車を
乗り過ちしわれの少年

先日は新著（絵本）の恵贈を受け、どうも有難うございました。大野誠夫さんの序にはじまる絵本の内部、一ページ、一ページに心を突きさされる思いで、今日やっと路上というところを読ましてもらっています。表出の一首は、

幾ばくの稼ぎのありて荷を仕舞い
立ちあがる老いの重き疲れや

を読んだとき、ふとひらめいた一首なんです。

いまはほとんど姿を消したようですが、昔は夜市というのが立ちアセチレンガスの青い灯に照らされて売る庶民の店がならび、そこを見て歩るくのは本当に楽しいものでした。花売りの老爺は私の実家の向かいに住む人で、その夜私は自転車のケイコ乗り、何時知らずこの夜市へきてしまっていました。横一列に行く人々を縫うつもりが、ハンドルを取られて向うむきに立った老爺の股間に乗りつけてしまったのです。

「ヨシ、ヨシ」——お爺さんは怒らなかった。私はいまゆとりのない現在の社会を淋しく思います。「お爺さんと子供が話し合って笑う」、こんな光景はいまではほとんど見られなくなりました。

少しの空地が子供たちの遊び場で、学校から帰るとすぐそこに集まり、遊びもいろいろありました。ところが現在はどうでしょう。国土美化なんておかしな言葉がつくられ、空地は柵に仕切られ、おっかなびっくり、マリを拾うさえ大人の眼を盗まねば「こらアッ」の一かつがはね返るのです。

家々は中を明るくするために硝子戸が多くなり、触れると「ガチャーン」、子供はどこで遊べば良いのでしょう。

学校は戸棚につまった食器のように、国語・算数・社会・理科など名前はいろいろに変わるが、どれもこれも似たものばかりがぎっしり。商品化した答案用紙。それでできる答えも割引き採点、八十点。「あアようできた。」

遊び場を奪い、情操教育の質を奪った大人たちは、ありあまる子供たちのエネルギーのコントロール化を話し合う。「スポーツが良い」。クラブ活動で予算が要る。それは会費をもらって、抽象的話し合いは抽象的答えしか生まない。

文部省が教育指導要項を発表する。「スポーツ活動を時間内に入れる」。これで大きく問題が発展する。「あの学校で、この学校で生徒同志集団喧嘩をした。遊休時間が長くなることは、エネルギー発散を悪く解釈して恐しがる。虫眼鏡で計算するように発達する科学、人の心も虫眼鏡で見れというところだろう。

反歌

強大な策に謀られ立つ足の
地につくかつかずしてふらつく哀れ

病源を探る鏡はのまれても
性根変え得る良薬はなし

三島事件に思う

職場新聞〝あせ〟No.29から

三島由紀夫の自衛隊市ケ谷総監室での割腹事件をめぐって今なおいろんな見解が入り乱れて述べられています。〝N・F〟の筆名の手記をご参考までに掲載します。この手紙を中心に話し合い、この問題を正しくつかみましょう。

手記

小説家であり、戯曲家であった三島氏が割腹していらい十日余が去った。

ここで三島氏とベ平連の小田実氏との双方による文学的、美的感覚の相違点について、簡単に記しておこうと思う。

美に対して前者は散華、つまり特攻隊精神をもってするとし、後者は難死——つまりどう生きてゆくのかという事に、美を見るのである。両者の美感覚の違いが、よく判断される。三島氏の願望的欲求が脚本、脚色し、演出したといっても過言ではなかろう。昭和元禄の狂い花としか、とることができないのである。

とも角も以上のことはさておいて、あの事件で一番のハイライトは何であったろうか、を考える必要があると思う。

それは割腹し、楯の会の仲間の介錯を受けて死んだということではなく、市ケ谷自衛隊本部のバルコニーから、自衛隊員に向かって演説したことにあるのではなかろうか。

そこで三島氏は「憂国」を説いたが、それは「バカヤロー」「英雄気どりをするな」というヤジと罵声で打ち消された。

その間十分間であった。このことは現在の自衛隊員が良識ある見解と態度を示した、といっていいのではないか。裏を返せば、現憲法を維持するか、それとも憲法を改正して徴兵制度を施行するか、という大きな問題につながっているからである。

ここには、日本国民が目前に選択を迫られている二つの道のあることが示されており、この事を素通りできない時機にきたことを感じるのである。

それ故我々炭鉱マンも、一考する必要があると思う。

×

その後の出版界には大きな〝三島ブーム〟が起きています。週刊誌や彼の作品が飛ぶように売れ、追悼のレコードまで発売されるそうです。

〝三島ブーム〟——それは三島事件よりも重大な危険性をはらんだ社会的な事件といえそうです。